



農事普及だより

(5月号 令和3年5月1日～5月31日)

〔発行〕鶴田町／鶴田町農業支援センター／鶴田町産業課
つがるにしきた農業協同組合鶴翔統括支店
西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室
〔編集〕西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室

気象

(令和3年4月15日 仙台管区気象台発表
東北地方1か月予報より)

東北日本海側では、天気は数日の周期で変わりますが、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。平均気温は、平年よりも高い確率が50%です。降水量は、東北日本海側で平年並または多い確率ともに40%です。

水稻

健苗育成と適正施肥で、良食味
・高品質米を生産しよう！

1. 育 苗

(1) 温度管理
5月は気温が高くなり、ハウス・トンネル内の温度も上昇するため、積極的な換気に努める。

降霜や低温が予想される場合は、被覆資材やストーブなどで保温する。

2. 水 管 球

かん水するタイミングは、床土が乾き、苗の葉が巻き始めた頃で、午前中に箱底まで届くようにたっぷりかける。機械的に毎日かん水すると、草丈が伸びる割には葉齡の進まない軟弱苗となり、田植え後の活着や初期生育が劣る。育苗中はできるだけ節水し、硬い苗に育てる。

3. 追 肥

田植え前に苗の葉色が淡くなかった場合は、1箱当たり硫安5g（窒素成分で1g）を水500mlに溶かして追肥する。追肥後は、肥料ヤケを起こさないよう葉が乾く前にかん水して肥料分を洗い流す。

2. 本 田

(1) 畦畔の補強

畦畔にネスミ穴などがあると水持ちが悪くなり、除草剤の効果が劣ったり、低温時の深水管理が十分できなくなるので早めに補強する。

■ 施肥量（窒素成分量）の目安（中苗移植）

品種	施肥体系	窒素量 (kg/10a)	基肥 (kg/10a)	追肥 (kg/10a)
つがるロマン	表層1回追肥	6～8 kg	4～6 kg	2 kg以内
まっしぐら	表層1回追肥	6～9 kg	総量の7～8割	総量の2～3割
	表層2回追肥	6～9 kg	総量の6割	1・2回目とも2割
青天の霹靂	・施肥体系は表層1回追肥体系を原則とする。 ・適正な生育量が確保できるよう、基肥は窒素成分量で6 kg/10a程度とする。 ・追肥時期は幼穂形成期とする。追肥の窒素成分量は乾田で2 kg/10a、半湿田で1 kg/10a以内を目安とする。 ・転作後の復元初年目の水田は施肥による生育コントロールが困難なので、作付けしない。			

(3) 代かき

代かきは、田面に高低差が生じないように行う。

生わら跡み田や田畠輪換田等の作物残渣がある水田では、残渣を土中に鋤込むため、浅水で代かきを行う。

(4) 田植え

日平均気温が13℃以上になるときを目安とする（五所川原アメダスの平年値では5月13日以降）。代枯れ防止と活着促進のため強風の日は避け、温暖な日を選ぶ。

「青天の霹靂」の栽培株数は70株/坪程度とし、直播栽培・疎植栽培は行わない。

(5) 田植え後の水管理

田植え後は直ちに水を入れ、初期生育促進のため、低温時は苗が冠水しない程度の深水管理、高溫時は浅水管理とする。

昼間止水・夜間かんいを基本とし、掛け流しはせず、水温を上げるようにする。

(6) 除草剤の使用方法

除草剤は、前年発生した雑草を考慮して選び、使用基準を守る。なお、除草剤を適正に使用しても特定の草（アゼナ、ホタルイ等）が大量に残る水田では、抵抗性雑草が発生している可能性があるので、これらに効果のある除草剤を選択する。

初期～中期の体系処理の場合は、中期剤の処理が遅れないように適期に散布する。

河川等の水質を保全するため、散布後7日間は絶対に落水・掛け流しをしない。

(7) 病害虫防除

① 箱施用剤使用の留意点

いもち病や初期害虫等を予防する箱施用剤は、薬剤毎に使用時期や方法が異なるので、農業の登録内容等を確認して適正に使用する。

② イネミズゾウムシ

移植前や移植時に防除をしなかった場合は、発生に応じて防除する。

発生が多い場合には6月上旬頃に水面施用剤を散布する。この時期の防除によりイネドロオイムシも防除できる。

③ 葉いもち

補植用苗をば場に放置したままにしておくと「葉いもち」の発生源となるので、補植が終わったら直ちに処分する。

(8) 農業害虫防除

育苗跡地で野菜等を栽培する場合は、育苗箱用の農薬処理を育苗ハウス外で行うか、ハウス内で行う場合はビニールシートなどの無孔シートを使用するなど、農薬が土壤に浸透しない対策を行う。

りんご

県生育観測は（板柳町五ヶ郷）のふじの発芽日は3月31日（平年4月8日）と平年より8日早く、展葉日も4月11日（平年4月18日）と平年より7日早くかった。

今後の気温が平年より1℃高く推移した場合、県生育観測は（板柳町五ヶ郷）のふじの開花日は平年よりも6日早い5月2日頃と予想される。

1. 霜害防止対策

開花前後は最も低温に弱い時期となる。花蕾着色期で-2℃、開花始め～落花期で-1.5℃～-1.7℃の低温に約60分遭遇すると被害が出始める。

霜は、晴天無風で午後7時の気温が6℃以下の日の翌日早朝に発生する可能性が高い。今年は生育が早まっており、霜害を受ける危険が例年よりも高いため、霜害防止対策を確実に実施する。

(1) 燃焼法

霜注意報が出たら、自園の気温の動きを観察し、0℃になったら燃焼資材に点火する。

(2) 送風法（防霜ファン）

防霜ファンを設置している園地では、ファンの始動温度を2℃に設定しておく。

寒気を伴ったときや著しく低温になったときは、防霜効果が低いので燃焼法を併用する。

幼果期に被害を受けた年もあったことから、結果後でもファンのスイッチは切らない。

(3) 事後対策

開花期までに霜害にあった場合は、結実量を確保するため、必ず人手授粉を実施する。その際、めしへの被害程度を確認して授粉する。

2. 人手授粉による結実確保

マメコバチを導入していない園地では、安定した結実量を確保するために人手による授粉を徹底する。また、マメコバチ導入園においてもその数が少ない場合や不順天候が続く場合には、人手による授粉を行って結実確保に努める。

(1) 摘 花

⑦ 人手による摘花
弱い花やそよぐ花等の不要な花は、全花摘み取る。

① 摘花剤の利用

結果が十分確保されると見込まれる場合は、石灰硫黄合剤又はエコルーキーを利用すると摘果作業時間が20～30%程度短縮される。使用方法は次表のとおりである。なお、いずれの剤も展着剤は不要である。

3. 摘花・摘果

良品安定生産のためには早期適正着果が重要であるので、摘花を積極的に実施する。ただし、霜害常襲地帯や開花期に天候不順が予想される場合は、一輪摘花の実施や摘花剤の使用を控え、えき芽花の摘み取りにとどめる。

(1) 摘 花

⑦ 人手による摘花
弱い花やそよぐ花等の不要な花は、全花摘み取る。

① 摘花剤の利用

結果が十分確保されると見込まれる場合は、石灰硫黄合剤又はエコルーキーを利用すると摘果作業時間が20～30%程度短縮される。使用方法は次表のとおりである。なお、いずれの剤も展着剤は不要である。

4. 石灰硫黄合剤及びエコルーキーの使い方

薬剤名	散布時期	本剤の使用回数	成分総使用回数	希釈倍数	10a当たり散布量
石灰硫黄合剤	満開後 (頂芽花の満開日とえき芽花の満開日)	2回	—	100～120倍	350～500ml
エコルーキー	満開日 追加散布を要する場合はその2～3日後に1回	2回以内	2回以内	100～150倍	300～600ml

(2) 摘 果

⑦ 人手による摘果

摘果は早いほど良いが、実止まりが判別できない時期（落花10日～15日後頃まで）にはまず一つ成り摘果を行う。

ただし、つがる、デリシャス系など年により早期落果の多い品種は、落花10日後頃までに一つ成り摘果を終える。

仕上げ摘果は、陸奥では落花15日後頃までに、他の品種は落花25日後頃までに終える。

① 薬剤による摘果

ふじ、王林、陸奥、北斗、シナノスイート、さんさ、早生ふじ、トキを対象に各品種の満開後2週間頃（ふじでは横径が10mm位の時）、紅玉は満開後3週間頃（横径が16mm位の時）にミクロデナポン水和剤85（1,200倍、展着剤加用）を、果実に十分かかるよう10a当たり350～500リットル散布する。

4. 病害虫防除

(1) 黒星病

「ふじの落花20日後頃」までが防除上最も重要な時期なので、10日間隔で散布する。散布予定日に降雨が予想される場合は、前日に散布する。低温・多雨等で開花期間が長引いた場合には、満開を過ぎたら花が残っていても「落花直後」の散布を行う。

(2) 腐らん病

枝腐らんは見つけ次第、切り取って処分する。

腐乳らんは再発病斑を含め見つけ次第、次のいずれかの処置を行う。

④ ニュウム液剤

泥巻きを行う場合は、周辺健全部を含めて病害部に厚く泥を張り付ける。

⑤ パッテレートまたはフランカットスプレーを使う場合は、周辺健全部を含めて病害部を紡錘形に削ってから塗る。

⑥ トッピングMオイルペーストを使う場合は、病害部を削り取り、さらに浸透性を高めるために周辺の健全皮（上下約5cm、左右2～3cm）を薄く削ってから塗る。

⑦ 腐乳らんの発病が著しい樹は、病原菌の伝染源になるので積極的に伐採する。

(3) 輪紋病

枝幹上のいぼ皮病斑が伝染源となるので、主幹や主枝などの大枝のいぼ状の病患部とその下の褐変組織は削り取ってトップジンMペーストを塗布する。また、削り取りができない細い枝は切り取る。

(4) ミダレカクモンハマキ

発生の多い園地では、「開花直前」及び「落花直後」にロムダンフロアブル、カスケード乳剤、アタプロンSC、ファイブスター顆粒水和剤、バイオマックスDFのいずれかを選択し、同一薬剤を連続して散布する。

(5) リンゴカクモンハマキ

越冬世代幼虫が多い園地では「落花直後」にカスケード乳剤又はアタプロンSCを散布する。

(6) クワコナカイガラムシ

発生が多い園地で、「展葉1週間後頃」にアプロードフロアブルを散布しなかった場合は、「落花10日後頃」と「落花20日後頃」に薬剤による胴木洗いを行う。

■ 薬剤散布

回	散布時期	基 準 薬 剤
---	------	---------

■ 薬剤散布

灰色かび病、黒とう病、べと病の重点防除時期なので、昨年の病害発生状況と今年の天候に応じて防除薬剤を選択する。なお、水稻育苗ハウス内にシャインマスカットが栽培されている場合、農薬散布、摘芽・摘梢等各種管理作業は、育苗箱搬出後に行う。

(スチューベン)

散布時期	基 準 薬 剤	散布量 (kg/10a)
新梢 伸長期 (約20cm) (5月 中旬)	ジマンダイセン水和剤 又はポリオキシンAL水和剤 又はインダーフロアブル 又はオニリーワンフロアブル バダンSG水溶剤 又はアグロスリン水和剤 又はアディオンフロアブル	1,000倍 500倍 8,000倍 2,000倍 1,500倍 2,000倍 1,500倍
開花 10日前 (6月上 ~中旬)	アリエッティC水和剤 又はキンノード水和剤 又はインダーフロアブル 又はオニリーワンフロアブル ベストガード水溶剤 又はバダンSG水溶剤 又はアグロスリン水和剤 又はアディオンフロアブル	800倍 600倍 8,000倍 2,000倍 1,000倍 1,500倍 2,000倍 1,500倍
		200 250



※農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。

(シャインマスカット(露地栽培))

散布時期	基 準 薬 剤	散布量 (kg/10a)
新梢 伸長期 (約15cm) (5月中 ~下旬)	ジマンダイセン水和剤 又はインダーフロアブル 又はオニリーワンフロアブル バダンSG水溶剤 又はアグロスリン水和剤 又はアディオンフロアブル	1,000倍 8,000倍 2,000倍 1,500倍 2,000倍 1,500倍
新梢伸長期 (約30cm) (6月上旬)	ジマンダイセン水和剤 又はインダーフロアブル 又はオニリーワンフロアブル	1,000倍 8,000倍 2,000倍
開花 10日前 (6月中旬)	アリエッティC水和剤 バダンSG水溶剤 又はアグロスリン水和剤 又はアディオンフロアブル	800倍 1,000倍 1,500倍 2,000倍 1,500倍
	ベストガード水溶剤 又はバダンSG水溶剤 又はアグロスリン水和剤 又はアディオンフロアブル	200 250



1. 結実確保

毛ばたきやマメコバチ等による授粉を積極的に行う。毛ばたきによる授粉は、5分咲き頃と満開期頃に少なくとも2回は行う。

2. 摘 果

紅秀峰や樹勢の弱った佐藤錦等は、結実過多により小玉になりやすいため、満開後30日頃までに摘果を行う。着果は、1花束状短枝果当たり2~3果程度とする。

3. 雨よけハウスの点検と被覆準備

管内では、老朽化が進んでいる雨よけハウスが散見されるので、被覆前に点検し、不具合のある場所は修繕する。なお、例年の被覆時期は6月上旬頃であるが、開花時期が早い年では5月下旬となる場合もあるので、ハウスの点検と併せて被覆の準備をする。

■ 薬剤散布

散布時期	基 準 薬 剤	散布量 (kg/10a)
満開5日後 (5月上旬)	パスワード顆粒水和剤 又はオニリーワンフロアブル 又はラリー水和剤 又はオーシャイン水和剤	1,500倍 2,000倍 2,000倍 3,000倍
満開12日後 (5月中旬)	オーソサイド水和剤80 ダイアジノン水和剤34	800倍 1,000倍
満開25日後 (5月下旬)	オーソサイド水和剤80 ダイアジノン水和剤34	800倍 1,000倍



※農薬はおうとう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。

注) パスワード顆粒水和剤はぶどうの「スチューベン」、「バッファロー（アーリースチューベン）」、「ボートランド」など一部の品種で、軽微な薬害を生じることがあるので飛散しないよう注意する。

春は空気が乾燥し、火災が発生しやすい時期です。剪定した枝などをやむを得ず園地で焼却する場合、山火事など火災の発生防止を徹底してください。

畑 作

大豆の適正は種、小麦の適期の追肥で生育量を確保しよう！



2. は種期・栽植密度

は種適期は5月中旬~下旬、は種量は7~8 kg/10aを目安とする。栽植密度は畦幅70cm前後、株間15cmの2本立てを基本とする。

は種直後の多雨は、出芽率の低下や初期生育の不良を招くので、気象条件に注意しながら作業する。

やむを得ず、は種が遅れる場合は株間を詰め、は種量を増やす。

3. 施肥量

基肥は、窒素成分量で2~3 kg/10aを基準とし、土壤条件、連作等を考慮し増減する。

4. 種子消毒とわい化病の予防

必要に応じて、下記の剤で塗沫処理を行う。

1. ほ場準備

転作田では排水対策として、ほ場周囲に明きょを掘る。

水稻作から大豆作に切り替える時は苦土石灰などを施用し、pH6.0~6.5を目標に土壤酸度を矯正する。

水分が多い状態での事前耕起は、ほ場の物理性が悪化するので、乾燥した状態で作業し、回数も最小限に抑える。

湿害を受けやすいほ場では、うね立ては種等で被害を軽減する。

3. 施肥量

基肥は、窒素成分量で2~3 kg/10aを基準とし、土壤条件、連作等を考慮し増減する。

4. 種子消毒とわい化病の予防

必要に応じて、下記の剤で塗沫処理を行う。

○: 効果あり ×: 効果なし

剤 名	鳥害防止	紫 斑 病	ア布拉ムシ類(わい化病)
キヒゲンR-2フロアブル	○	○	×
クルーザーFS30	×	×	○
クルーザーMAXX	○	○	○

注) クルーザーFS30は鳥害防止効果がないので、鳥害が予想される場合は事後にキヒゲンR-2フロアブルの塗沫処理を行うこと。

5. 根粒菌の接種

大豆栽培初年目のほ場は、根粒菌の着生が悪く生育に影響するので、種子消毒後に市販の根粒菌を粉衣する。

6. 雜草対策

は種後、速やかに土壤処理除草剤を散布する。ほ場の細土が粗い場合や、ほ場表面の水分が低い場合は効果が劣るので、耕うんをていねいに行うとともに、明きょやサブソイラー等による排水対策を行う。



2. 追 肥

2回目の追肥適期は、一穂粒数の確保やタンパク質含有率向上に有効な「止め葉抽出期」から「出穂期」頃で、例年5月中旬から下旬頃。次の目安を参考にほ場を観察し、適期に実施する。

なお、追肥量は、窒素成分で2 kg/10 aを基準とし、生育に合わせて増減する。

3. 排水対策

転換期では出穂期以降の湿害を防止するため、明きょの設置や排水溝の点検を行う。

4. 病害虫防除

(1) 赤かび病

開花期から乳熟期にかけて、気温が高く潤滑な天気が続くと発生が多くなるので、開花始め~開花期に1回目、その後に2回目の薬剤散布により防除する。

感染すると収量や品質が低下するばかりでなく、人畜に有害な赤色(テオキシナパロール)を生産し、下痢や嘔吐などの中毒症状を起こす場合があるため、出荷できなくなる。

(2) オウトウハマラミバエ

発生の多い園地では、満開12日後と満開25日後にダイアジノン水和剤34の代わりにアディオンフロアブル2,000倍を使用する。

(3) うどんこ病

茎数が多く、草丈が伸びているほ場で発生し易いので、病害虫発生予察情報等に注意し、適期防除に努める。

1. 生 育

県生育観測ほの幼穗形成期の到達日は、ネバリゴシで平年並の3月23日、キタカミコムギで2日早い3月27日であった。

■ 幼穗形成期の到達状況 (県生育観測ほ)

場 所	品 種	本 年	平 年	前 年
つがる市木造出来島	ネバリゴシ	3月23日	3月23日	3月8日
つがる市木造吹原	キタカミコムギ	3月27日	3月29日	3月10日

■ 追肥判断の目安

追肥時期	判 断 の 目 安
止め葉抽出期	止め葉が全体の4~5割開いた時期
出穂期	ほ場全体の茎の40%~50%が出穂した時期

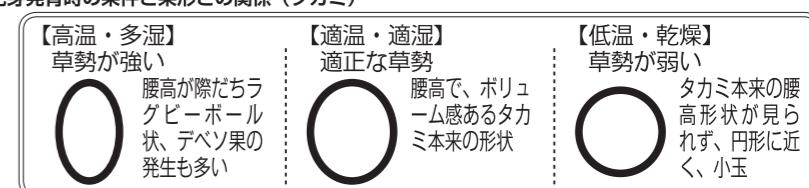
春の農作業安全運動 実施中

4月1日～5月31日

トラクター等の大型機械の使用が始まります
まずはワンチェック、ワンアクションで農作業安全！

が良品生産に重要である。

■ 花芽発育時の条件と果形との関係 (タカミ)



1. 育苗管理及び定植

8月出荷・無摘心栽培、9月出荷・摘心栽培は、6月が定植適期となるため、出荷時期に合わせて挿し芽作業を行う。育苗期間は15~20日を目標とし、根長が1~2 cmになったら定植する。特に小さめのセルトレイで育苗した場合は、苗が老化しないよう注意する。

施肥は全量で窒素成分1~2 kg/aを基準とし、基肥として6~7割を施用する。施肥前に土壌診断を行い、それに合わせて施肥量を調整する。追肥は、葉色や生育の状況に応じて適宜行う。

温度変化が激しい時期なので、低温時には保温を行なうなど、こまめな温度管理に努める。

2. 病害虫防除

白さび病は、温度20°C前後の多湿状態で発病しやすい。施設内の換気に努め、親株管理の段階から薬剤による予